ウミガメの保護と自然豊かな人の生活

NPO法人　日本ウミガメ協議会 会長
東京大学大学院農学生命科学研究科客員助教授
亀崎 直樹

日本に産卵しに来るのはアカウミガメというウミガメで、無骨な雰囲気の漂うカメです。砂浜に上陸すると動きは速くなく、フーフーとため息をつき、涙を流しながら産卵するその姿は、海辺で生活する人に自然に対する畏敬と親しみの念を与え、多くの土地でカメを大切にする風土が育ちました。卵を全て取らずに一部を残しておく習慣は、かつて多くの土地で聞かれましたし、漁でとれたカメや産卵しているカメに酒を飲ませる風習も各地で聞きます。また、ウミガメの死体を葬った墓も全国にいくつも見ることができます。これらは、現在の自然保護思想の原点のようなものに相当するものでしょう。

このように動物の中では比較的人間の受けがいい動物であるためか、南日本の各地でウミガメの保護活動が始まりました。日本で最も早く保護活動が始まったのは徳島県の日和佐町です。当時の中学校の理科の先生が、中学生を指導しながら基礎データを集め日本のウミガメ保護の端緒を築きました。その後、屋久島、宮崎、和歌山、静岡など、ウミガメを保護しようとする活動は各地で始まりました。

しかし、一言で保護といっても、どんな活動が保護になるのかわかりません。実際に何をすれば保護につながるかを考える必要が出てくるのです。そこで科学が必要になってくるわけです。つまり、科学的にウミガメの生活を知ることで、初めて適切な保護活動が可能になるわけです。従って、保護と科学は表裏一体のもので、両方が同時平行して行われ、相補的な補完が行われるのが理想であるわけです。そのためには、研究志向の研究者と保護志向のボランティアとの情報の共有ということが不可欠であるわけです。

日本ウミガメ協議会はその情報の共有を促進する場として、また、保護と科学のバランスのとれた発展を目的として1990年に発足しました。これまで、保護活動としては、日本全国の産卵地で行われている卵の保護や啓発普及活動を支援する傍ら、ウミガメを識別する標識の統一、さらにはウミガメの身体測定をするための道具の統一などを行ってきました。また、各地で活動するボランティア団体の情報を共有し、より正確で裏づけのある議論を形成することを目指してきました。その結果、協議会の関わるメンバーが若手の研究者を受け入れ国際的な科学雑誌に論文も出ましたし、ボランティアにとってはより正確に産卵の現状の客観的な評価を行えるようになりました。例えば、産卵したアカウミガメは東シナ海に泳いでいくことや、日本で誕生した子ガメは海流にのって太平洋を横断し、メキシコの沖で成長することもDNAの研究から明らかになりました。このように日本で産卵するウミガメを保護するには、彼らの長い生活史のなかで過ごす世界中の海の環境を考える必要が出てきました。従って、ウミガメの保護は国際協力が不可欠な訳です。

ところが、いざ本質的な保護対策をというときに問題となるのは日本の縦割り型の行政です。日本で海のことを取り仕切るのは海上自衛隊を擁する防衛庁、海上保安庁、そして水産業を担当する水産庁です。ではウミガメの保護を担当する省庁はどこかというと見当たらないのです。一般国民からは野生動物の保護だから環境省ではないかと考える人が多いのですが、環境省が海の行政に意見を挟むのは、縦割り行政のなわばり意識が存在しているようで、まだまだ難しい状況にあるのです。という訳で日本では海洋動物の保護に関しては極めて手薄な状況が続いています。

今後、我々が行っていかなければいけないと考えているのは、単にウミガメの保護だけではなく、ウミガメの産卵するような自然豊かな浜辺とそこで暮らす住民の心地良い生活をどのように創生するかということです。例えば、最近とかく評判の悪い公共工事ですが、そこに充当されている予算がウミガメやその他の自然のモニタリングに回すことが出来ないだろうか。つまり、自然を壊すことに使われていた税金を、少し、それを見守るエネルギーに費やしてもいいのではないかと考えています。人は自然を美しいと思います。また、徹底的に自然を無くした都市もそれなりに美しいと感じます。ところが、中途半端に自然を破壊した地域は非常に見苦しいものがあります。現在の地方の集落にはこの中途半端な開発が横行し、みっともない集落が余りにも増えすぎています。これまで、人は都市型の経済システムのみを模索してきましたが、これからは自然を保全した状態での集落型の経済システムを確立することが必要ではと考えています。

特定非営利活動法人日本ウミガメ協議会
ホームページ　http://www.umigame.org/
E-mail: JCG03011@nifty.ne.jp